

プロフィール（登壇順）

開会の辞



佐宗 章弘 (SASOH Akihiro)

名古屋大学大学院工学研究科・教授、名古屋大学副総長（産学官連携・スタートアップ担当）未来社会創造機構長、同大学未来社会創造機構 Future Society Studio (FSS) 室長。専門は、航空宇宙工学（圧縮性流体力学・衝撃波および非化学宇宙推進工学）。単著書に、*Compressible Fluid Dynamics and Shock Waves* (Springer, 2020)、*圧縮性流体力学・衝撃波*（コロナ社, 2017）。4年前に FSS を組成し、月1回開催の Future Society (FS) ダイアログほか、ワークショップやシンポジウムを通じて、多様な分野・属性のメンバーによる「大人のクラブ」としての場を提供。徐々に参加者が増えているのにバリューを感じている。



藤木 秀朗 (FUJIKI Hideaki)

名古屋大学大学院人文学研究科・教授、同研究科附属超域文化社会センター・センター長および同大学未来社会創造機構 Future Society Studio 副室長。専門は、映像メディア研究、環境人文学、歴史社会学。主な単著書に、*Making Audiences: A Social History of Japanese Cinema and Media* (Oxford University Press, 2022)、*Making Personas: Transnational Film Stardom in Modern Japan* (Harvard University Asia Center, 2013)。現在、エネルギー、廃棄物、障がい者、動物、記憶、人新世の映像メディアをテーマにした単著書 *Planetary Ecology from the Post-disaster Local: Cinema and Media in Fukushima and Beyond* (仮題) を準備中。また、国立シンガポール大学との共同研究プロジェクト“Media in Motion: Bridging Digital and Critical Humanities”を遂行中。

パネル1：ダイバシティとモビリティ



松行 美帆子 (MATSUYUKI Mihoko)

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・教授。専門は都市・地域計画。日本の都市・地域計画に加え、博士課程でのタイ留学を契機に、開発途上国・新興国における都市・地域計画の研究に長年携わってきた。土地利用と交通、スマートシティ、防災・復興、住宅政策などを主な研究領域とし、近年は都市空間における公正さ (equity /justice) にも注力している。主な著書に *Urban Transportation Systems in Emerging Countries* (Routledge, 2025, 共編著)、『グローバル時代のアジア都市論』（丸善出版, 2016, 共編著）など。



天野 馨南子 (AMANO Kanako)

(株)ニッセイ基礎研究所・生活研究部 人口動態シニアリサーチャー。東京大学経済学部卒。日本証券アナリスト協会認定アナリスト。95年日本生命保険相互会社入社、99年より同社シンクタンクに出向。専門分野は人口動態に関する社会の諸問題。総務省「国勢調査有識者会議」、子ども家庭庁「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」構成員、富山県政アドバイザー(少子化対策)、愛知県豊田市「総合計画推進会議」委員等、政府・地方自治体・経済団体等の人口関連施策アドバイザーを多数務める。エビデンスに基づく人口問題(少子化対策・一極集中・ダイバーシティ・ライフデザイン)講演実績多数。著書に『まちがいたらけの少子化対策』(金融財政事情研究会)、『未婚化する日本』(白秋社・監修)、『データで読み解く「生涯独身」社会』(宝島社新書)等。



工藤 晋平 (KUDO Shinpei)

名古屋大学心の発達支援研究実践センター・准教授、同大学学生支援本部アビリティ支援センター長。九州大学大学院人間環境学府にて博士(心理学)を取得。大学で勤務する傍ら刑務所での受刑者のカウンセリング、出所後の社会復帰支援などに取り組み、その中で刑余障害者等への地域生活の支援に携わってきた。現在は名古屋大学心の発達支援研究実践センターに所属し、学生支援本部アビリティ支援センター長として、障害のある学生の修学支援に携わっている。司法領域の臨床心理学的支援、児童福祉領域での支援者支援、教育領域での障害学生支援など、社会において周辺化しやすい人たちのいる場を渡りながら研究、支援活動を行っている。現在は障害のある教職員への支援を行う障害者支援室副室長および副総長補佐として、学内の障害者施策にも取り組んでいる。



長山 智香子 (NAGAYAMA Chikako)

名古屋大学大学院人文学研究科超域文化学学繋メディア文化社会論・准教授。大衆文化における他者と越境の表象、食のメディア化、社会的公正とエコロジーのためのメディア実践に関心をもつ。最近の著作に“Go Panda Go!: The Invention of Panda Circus and Its Exhibition in China-Japan Municipal Diplomacy,” *Humanimalia* 16, no.1 (December 2025, 共著), 359-398; “Reframing the Visuality of Food: Instagram Images by Northern Japanese Farmers,” *Verge: Studies in Global Asias* 9, no. 2 (Fall 2023), 37-49; “Neoliberal Women’s Agency and Time-Space Management in the Cook-and-Save Method, Tsukurioki,” *Gender and Food in Transnational East Asias*, Jooyeon

Rhee, Eric P. H. Li, and Chikako Nagayama 編 (Lexington Books, 2021), 163-182;「家族の物語からのクエアな逸脱:角田光代の『八日目の蟬』にみる時間と空間」, 菊地夏野, 堀江有里, 飯野由里子編『クエア・スタディーズをひらく2』(晃洋書房, 2022)がある。



外山 友里絵(TOYAMA Yurie)

名古屋大学未来社会創造機構モビリティ社会研究所(GREMO)特任助教兼東京大学生産技術研究所ハーモニック・モビリティ研究センター特任助教。名古屋大学未来社会創造機構 Future Society Studio メンバー。博士(工学)。専門は都市交通計画、モビリティオブケア、モビリティイノベーション(自動運転、Mobility as a Service 等)。共著書・論文に、「自動運転時代を見据えたバス運転士の業務実態の可視化と業務の機械化に関する考察」(土木学会論文集, 2025)、「Urban Transportation Systems in Emerging Countries」(Routledge, 2025)、「バスがまちを変えていく」(IBS, 2016)などがある。現在は、子どものモビリティや家族内送迎の問題など、FSS で異分野融合しながら多角的なアプローチで取り組むことにパッションを注いでいる。



齊藤 弘久(SAITO Hirohisa)

名古屋大学未来社会創造機構 Future Society Studio 教授。社会学者として、権力と知識の交差に関心を持つ。特に、高度に技術的な問題において、政府、専門家、市民の相互作用がどのように政策決定を形成するかを研究している。また、マインドフルネスとデザイン思考の実践者として、全人的な成長と社会的幸福を促進するためのイノベーションを追求している。現在は、FSS の発展と、コー・イノベーション大学の立ち上げに時間とエネルギーを注ぎ、社会全体のウェルビーイングを高めるイノベーションを促進するエコシステムの中核としての高等教育機関の変革に取り組んでいる。

パネル2:コミュニケーション資本主義とモビリティ



谷口 綾子(TANIGUCHI Ayako)

筑波大学システム情報系社会工学域教授(博士(工学))。工学部土木工学科で交通工学・交通計画を学び、社会人博士後期課程で心理学を学ぶ。建設コンサルタント、JSPS 特別研究員(PD)(東京工業大学)、筑波大学講師、准教授などを経て2019年より現職。内閣府規制改革推進委員会、国土交通省社会資本整備審議会などの委員、土木学会理事、都市計画学会理事、等を歴任。著書に「モビリティをマネジメントする(2015)」などがある。クルマ依存からクルマをかしこく使う方向へ、人々の自発的な行動変容をうながすコミュニケーション施策、モビリティ・マネジメントの理論と実践研究に携わる。直近では科研基盤 A 自動運転の社会的受容に関する学際研究の代表を務めるほか、内閣府 SIP にて「モビリティ関連のナラティブ共有」コンソーシアム代表として研究を進めている。



清水 知子 (SHIMIZU Tomoko)

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科・教授。専門は文化理論、メディア文化論。単著に『文化と暴力—揺曳するユニオンジャック』(月曜社)、『ディズニーと動物—王国の魔法をとく』(筑摩選書)、共著に『コミュニケーション資本主義と〈コモン〉の探求—ポスト・ヒューマン時代のメディア論』(伊藤守編、東京大学出版会)、『芸術と労働』(白川昌生、杉田敦編、水声社)、『移民・難民・アート—越境する想像力』(川上幸之介、高谷幸編、ヘウレーカ)、共訳書にジュディス・バトラー『アセンブリ—行為遂行性・複数性・政治』(青土社)、『非暴力の力』(青土社)、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『叛逆』(NHK 出版)、デイヴィッド・ライアン『9・11 以後の監視』(明石書店)など。



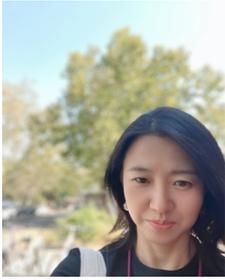
水嶋 一憲 (MIZUSHIMA Kazunori)

大阪産業大学経済学部・教授。専攻はメディア文化研究、社会思想史。主な著書に『コミュニケーション資本主義と〈コモン〉の探求』(共著、東京大学出版会、2019年)、『メディア論の冒険者たち』(共著、東京大学出版会、2023年)、『プラットフォーム資本主義を解読する』(共編著、ナカニシヤ出版、2023年)がある。最近の論文に「テスライズムを超えて—プラットフォーム資本主義の諸傾向と未来の再想像」(『メディア研究』106号、2025年)。訳書に、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハートの〈帝国〉三部作および『アセンブリ—新たな民主主義の編成』(共訳、岩波書店、2022年)など。現在は、プラットフォーム社会におけるメディア・技術・資本の新たな交差をめぐる学際的研究に取り組んでいる。



久木田 水生 (KUKITA Minamo)

名古屋大学大学院情報学研究科・准教授、同大学未来社会創造機構 Future Society Studio メンバー。京都大学大学院文学研究科博士後期課程思想文化学専攻(哲学)修了。博士(文学)。専門は情報の哲学、技術哲学、技術倫理、人文情報学など。著書に『麦と Twitter』(共立出版、2026年)、『AI・ロボットからの倫理学入門』(共著、名古屋大学出版会、2025年)、『人工知能と人間・社会』(共編著、勁草書房、2020年)、『軍事研究を哲学する—科学技術とデュアルユース』(共著、昭和堂、2022年)、『3STEP 技術哲学』(共著、昭和堂、2024年)などがある。



金 相美 (KIM Sangmi)

名古屋大学大学院人文学研究科・教授。同大学未来社会創造機構 Future Society Studio メンバー。韓国生まれ。2007 年度に東京大学大学院にて博士号(社会情報学)を取得。2008 年度より名古屋大学に赴任。専門は社会情報学・社会心理学である。主に、情報メディアの社会的影響、社会関係資本の生成とインターネットとの関係、ソーシャルメディア利用行動と情報の流れについて研究している。単著に『韓国の情報化と縁故主義ネットワークの変容』(ミネルヴァ書房、2011 年)、『韓国 N 世代白書』(トラベルジャーナル、2002 年)、共著に『日本メディアの現実と理解』(韓国言論振興財団、2020 年)などがある。主な論文に、(共著)“Pathways to Youth Political Participation: Media Literacy, Parental Intervention, and Cognitive Mediation,” *Mass Communication and Society*, pp.99–121, 2022、(共著)“Revisiting the Hypothesis of the Political Knowledge Gap in the Asian Context,” *Journal of Socio-Informatics*, 11(1), pp.1–15, 2018 などがある。

パネル3:環境問題とモビリティ



伊藤 みほ (ITO Miho)

株式会社デンソー 上席執行幹部・先端技術研究所長、名古屋大学未来社会創造機構・客員教授。専門は、機能材料を基盤とした先端デバイス研究、量子論的アプローチによる材料設計・解析、ならびにモビリティ領域における次世代技術の創出。1994 年、日本電装(現デンソー)入社以来、一貫して先行 R&D に従事。2006 年、東北大学大学院工学研究科にて自動車用排ガスセンサの量子論的研究により博士(工学)を取得。2007 年以降は研究マネジメントに軸足を移し、2021 年より先端技術研究所長として、マテリアル、量子、AI、ヒューマンサイエンスなど多領域を束ね、組織横断での知の統合とイノベーションの加速に取り組む。技術の社会実装と未来産業創生を見据え、産学連携による研究エコシステムの構築にも注力している。



大久保 遼 (OKUBO Ryo)

明治学院大学社会学部・教授。専門はメディア論、社会学、映像文化史。単著書に『これからのメディア論』(有斐閣、2023 年)、『映像のアルケオロジー: 視覚理論・光学メディア・映像文化』(青弓社、2015 年)。共著書に『スクリーン・スタディーズ』(光岡寿郎との共編、東京大学出版会、2019 年)、『ポストメディア・セオリーズ』(伊藤守編、ミネルヴァ書房、2021 年)など。最近の論文に「有限性と物質性: 情報化と素材、エネルギー、廃棄物」『社会学評論』(2026 年刊行予定)、「物質と環境: ユッシン・パリッカの物質主義メディア理論」『メディア研究』(2023 年)など。現在、メディア研究における物質と環境の問

い直しをテーマにした単著書『人新世のメディア論:メディア研究の再設定』(仮題)を準備中。



クリストフ ルプレヒト (Christoph D. D. RUPPRECHT)

愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科・准教授。一般社団法人 FEAST 理事(2021 年～)。地理学・都市計画・生態学博士(2015 年、濠・グリフィス大学 Environmental Futures Research Institute)。マルチスピーシーズの持続可能性、マルチスピーシーズ都市、食と農、非公式緑地、脱成長、ソーラーパンク、ゲーム・アート・フィクションなどの超学際的手法を通じて共生共栄の未来への道筋を探求中。『みんなでつくる「いただきます」』(2021)、「Multispecies Cities」(2021)、「Solarpunk Creatures」(2024)共著。



森川 高行(MORIKAWA Takayuki)

名古屋大学未来社会創造機構モビリティ社会研究所 特任教授・名誉教授、COI-NEXT 地域を次世代につなぐマイモビリティ共創拠点プロジェクトリーダー。専門は、次世代モビリティ、交通計画、都市計画、消費者行動論。交通需要予測モデル、ICT を活用した交通システムや自動運転など先進モビリティに関する研究に取り組み、現在は、革新的地域モビリティシステムに関わる研究を推進中。主な著書に、『モビリティイノベーションシリーズ 1 巻 モビリティサービス』(コロナ社、2020、共編著者)や『道路は、だれのものか』(ダイヤモンド社、2010 年)など。



内記 香子(NAIKI Yoshiko)

名古屋大学大学院環境学研究科・教授。同大学未来社会創造機構 Future Society Studio 副室長。専門は国際法学で、前職の大阪大学では国際通商法を担当、今はビジネス×サステナビリティ×デジタル化を研究中。スマートシティ研究や「デジタル製品パスポート」などに注目。



丸山 恵(MARUYAMA Megumi)

名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部リサーチ・アドミニストレーター。科学コミュニケーター、サイエンスライターを経て、2020 年より現職。同大学未来社会創造機構 Future Society Studio メンバー。研究と社会をつなぐアウトリーチ支援を担当。研究の背景にある研究者の思いや試行錯誤にも光を当てながら、市民との対話の場づくりに取り組んでいる。